

実証主義と美学 I

五十嵐 嘉 晴

美学的研究は、哲学的論考であろうと科学的分析であろうとも、事実を踏まえた学的探究である。この事実の把握と編成には、多様で多層な段階や仕方が認められる。学が確実な対象把握に基づき、正確な方法に拠って進められるのは当然の態度であるが、この根本的な地点においてすでに幾多の相違が生れてくる。その理由を明らかにする事は重要であるが、今我々はその様な大事業を主題として設定することはしない。しかしこの問題意識を離れずに、学が目指す客観的な理解と方法の成立への貢献のため、実証主義と言われる方法と精神を検討し、美学がそれによって如何なる研究態度に立つべきであるかについての反省の一助としたい。

この課題は、次の様な問題意識に促されている。美学に於いても今日科学的方法による成果は積み重ねられて来ているし、もともと〈科学〉と〈学〉は同様な知的探求であったからであり、学が科学的や歴史的方面と哲学的方面などに分化して行っても、それらが客観的事実に則して真実に沿って編成され、提携していく事が求められるからである。そこで哲学的問題の全面的あるいは根本的議論はそれとして重要で魅力あるものであるが、ここではその問題を念頭に置きながらも、一般により確証性のある歴史的や科学的研究に照明を当てて、その基本的見地を正しく認識する作業の一環に取り組むこととしたい。そのため、従来の哲学的解釈を批判して、近代的で科学的な態度をモットーとして登場した実証主義が、学術上で如何なる志向を与えるものであるかを検討して、学の方法論の批判に資したい。

19世紀の科学的発展と平行して登場したH. テーヌの芸術学やフェヒナーの「下からの美学」などの意義は、しばしば美学史上で解説さ

れるが、その科学性や哲学性について、一層充分な理解が求められよう。これに実証主義と美学の関連やその内容の考察が必要であろう。そこには、単に科学的分野からの検討だけでなく、哲学的な指摘も不可欠となる。というのは、実証主義とは、科学的方法論と言うよりは、一つの哲学的態度でもあったからである。この事を見るため、まず実証主義の概念を調べることから始めることとする。

1

実証主義 (Positivism) という概念は、哲学体系ないし哲学方法として、1820年代の中頃に、オーギュスト・コントによって提唱された。その名称も彼の哲学と共に始まる。⁽¹⁾

実証的とは、もともと pono(ponere)の形容詞化positusに由来し、自然的に対して後天的に設定されたという意味で用いられたが、言語辞典に整理されて書かれている様に、様々な語義を持つに至っている。コントは、実証的な精神の特性と意義を、次の様に説明した。⁽²⁾

① 実在的 (réel)⁽³⁾

これは、空想的 (chimérique) の反対として言われる。それは我々の知性にとって真に実行しやすい研究、即ち知性の幼年期に特有の不可解な神秘を排除する事に、身を献げる新しい哲学精神に良くマッチしたものである。

② 有用な (utile)

これは、無益 (oiseux) に対立するものである。それは哲学に於いては、不毛な好奇心の空満足ではなく、個と集団の我々の正しい状況の連続的な改良について、我々の健全な思弁に必要な方向を呼び戻す。

③ 確実性 (certitude) を形容する

不分明 (indécision) と対立する。それは、古

い精神体制が惹き起す不確定な懷疑と終りなき論争にかえて、個人に於ける論理的調和と、種族全体に於ける精神的共同を、自発的に制定する様な哲学の特性を指す。

④ 正確な (précis)

あいまいな (vague) に対置される。第3の意味と混同されることも多いが、次の意味を持つ。即ち古い哲学方法は、超自然の權威に依って、常時圧迫に基づいてしか、必須なる訓育を伴わないで、必然的にあいまいな見解に導かれたのに対して、諸現象の性質に矛盾せず、我々の真の要求に合致した正確さの度合を至る所で得るべき、真正なる哲学精神の不変の傾向を指すものである。

第1より第4までは、当初の神学的あるいは形而上学的な哲学に特有の様態と、真の近代哲学とを区別するものである。

⑤ 否定的 (négatif) に対立する。

これは、破壊に対して、編成 (organiser) に向けられたものとして、真の近代哲学の最も秀でた特性を示す。これは、長い間、編成的 (organique) であった神学的精神とも、批判的 (critique) でしかあり得なかった形而上学的精神とも、区別されて、今日その重要さが明白となっている。絶対的なものは否定的で、実証的であるという事は相対的であるという事である。

実証的の語義をこの様に解説するコントは、それらの結合を次の様に評価した。「この表面的な多義性 (ambiguité) は、今後は現実的な不都合を与えない。むしろ、大衆の理性がそれらの恒久的連合を認めるに至った時、幾つかの区分ある属性を只一つの日常的な表現のもとに、進歩した国民にあっては統一するという方式の、その見事な凝縮化の重要な一実例を見るべきであろう。」⁽⁴⁾ かような実証精神は、「普遍的な良識」の属詞と一致すると共に、⁽⁵⁾ 物理学者の精神を示す。この自然学者は、自然現象の研究に、ただ事実に対する専心のみをもって没頭するのである。

コントの提唱する学術精神は、それ以上追求してその内容を分析しなければ、多少の程度

の違いはあっても形式的には一般に、全ての科学者や哲学者の方法の意識であるとも言える。⁽⁶⁾ 従ってここで重要なことは、コントが与えたその哲学方法としての特徴である。であるから我々は、彼が有用で功利的で、現実的な哲学を近代的と考えていた事と、神学的あるいは形而上学的哲学を嫌い、また批判を好まず、有機的編成を願っている事を注目しておきたい。なおこれに加えて、コントは後に次の様に、実証的に独自の意味をも付与しようとした。

⑥ 「人間的運動の一般法則は、どこから見ても、人は段々に宗教的になるという事実に存する。即ちそれは、人が自己自身や仲間と和を持って考え行動するところの状態、内面での統一と外部での結びつきの状態である。」⁽⁷⁾ そこから、共感的 (sympathique) という意味が必要となる。それは、「人を自己より高めて、人間性 (humanité) との共同に入れる。それを通じて人は生き、そのために人は働くのである。」⁽⁸⁾

実証主義とは、かような実証性を持つ、実証的哲学精神による、「認識の総体の再組織」なのである。この再組織は、教理による統一ではなくして、方法論的統一であり、相対主義を保持して実証主義となるのである。⁽⁹⁾ 個々の分野の諸理論については、それらが質的に同一であれば良いとされる。

コントは哲学を、「古代人とくにアリストテレスが、人間の概念作用の一般的体系を指すものとして与えた意味」⁽¹⁰⁾ で考えている。それに実証的という規定を要請するのは、実証的方式が「観察された事実の整合 (coordination)」を目的としていると考えるからである。「自然哲学」とか、「諸科学の哲学」と言う名称は、社会現象を含む全種の現象について扱う哲学と理解されていないし、また英国で言われる「自然哲学」は、大変細分化された専門にまで入った科学の総体を指すのであるが、実証哲学は、実証諸科学と対比して、均一の方法に従って、研究の一般的計画の諸部分を形成していると考えられる諸々の科学の一般性についての研究と言え

るとされる。⁽¹¹⁾ コントの弟子リトレ (Littre) の表現を借りれば、次の様になる。「実証哲学は、実証諸科学の体系化された総体より生ずる様な世界観」なのである。⁽¹²⁾

神学的、形而上学的段階に続く、近代の実証的段階のこの世界観が、功利主義的で不可知論的色彩のものとなる事が、コントの主張から知られる。「実証的狀態にあっては、人間精神は、絶対的概念を得る不可能を認めて、宇宙の起源と行く方を求める事や、諸現象の内奥の原因を認識する事をやめて、それらの実効ある法則 (lois effectives)、即ちその継起と類似の不変な連関を、推理と観察のよく組み合わされた使用によって見出すことにだけ専心する。」⁽¹³⁾ 言い方を変えれば、「実証哲学は、全ての現象を不変な自然法則に従ったものと考え、法則の正確な発見と、法則を出来るだけ少数に切り詰めることが、我々の全努力の目的である。第一原因であれ究竟因であれ、原因と呼ばれるものの探査は、我々に絶対手がけられぬものであり、無意味なことだと考える。」⁽¹⁴⁾

この様に実証精神は、反形而上学によって、不可知論的に現象的研究に仕事を限らんとするのが特徴となっている。自然法則の自然は追求されず、法則の発見と単純化に専ら関心が向けられる。コントは、諸学の分類を論じた際に次の様に言う。「ここでは、〔生物的と非生物的の〕二部類の物体が同じ性質 (nature) であるかないかを調べるのが問題ではない。〔中略〕その様な問題は、何らかの物体の内奥の性質を断じて知らぬ事をきっぱりと表明する実証哲学の領分ではない。」⁽¹⁵⁾ この態度は、科学的首尾一貫性を有せぬ様に思われる。何故なら、自然学者に徹して物体の法則を知ろうとする時、我々は自然の内的と外的な性質 (nature de la nature) を追求する道に入っていると言えるからである。コントの主張は、自然を本質とする哲学 (形而上学的段階の最後の哲学とされる) を嫌うからか、逆に自然の存在を無反省に認めているからか、自然の存在が問題ではなく現象を問題とするからか、内在的性質は現象でなく本質である故かなどの理由に依っているものであろう。

ともあれ人間精神は、天体・無機体・有機体などの自然学を成立させた今日、社会自然学 (physique sociale) を樹立して締め括ることが残されていると説かれる。⁽¹⁶⁾ そこから社会学の必要が出て来る。諸学の分類は、単純さから複雑さへの段階、換言すれば現象の一般性の段階によって、秩序 (階位) が決定される。即ちその結果、天文学 (天体物理) →物理学と化学 (地上無機物理) →生理学と社会物理学 (有機物理) の順が示される。これはまた、知識の発展順序も表しているとされる。数学は、自然論理から演繹による一定の秩序への驚異的な延長に外ならず、実証哲学全体の論理的なものとして、真の根本的基礎であるとされる。⁽¹⁷⁾ また社会学によって論理学を成立させて、それを最高目標学とする事も考えた。⁽¹⁸⁾ これがコントの目指す、「百科全書的」秩序の概略である。

社会学には、進歩の観念を持つ社会動学 (la dynamique sociale) と、秩序の観念を持つ社会静学 (la statique sociale) がある。後者は社会の普遍的協調 (consensus universel) を研究し、前者は人類の必然的で継続的運動を研究する。ただしコントは、人間の性質 (nature) は、変化せずに進化するという見解である。ここにまた我々は、コントが機械論 (mécanique) 的概念 (力学) を応用している事を見ると共に、秩序の観念から静学的発想に重きを置くのではないかという事を、実証精神の第6の指標などに鑑みて考える。それは彼が唱えた人間教の始まりに於いて、決定的に明らかとなろう。

コントが教育学的関心を強く持っていた事は、『実証精神叙説』(1844年)の後半部分や書簡などから知る事が出来、政治的関心はその『実証的政治体系』(1851~1854年)などによって知られるが、政治では、人民は行動に直接参加すべきでないとい貫して説いている。学的啓発が重要なのである。そして彼は、科学は思弁的で純粹であるべきであって、それ自体のために修められなければならない、それが生ぜしめる実際的な結果は顧みない、とも言う。⁽¹⁹⁾ 科学は抽象であり、理論的なものである。人間については、孤立した個人は抽象であるが、種としては実在

であるとされる。即ち人間性・人類 (humanité) は、大存在 (Grand Etre) であり、唯一のレアリテであるとされる。ここから社会学は、愛他主義 (altruisme) を原理とする“人間教” (religion de l'Humanité) となって行くのがコントの思想である。これらの説を貫いて、再建の観念が彼を導いている。コントの哲学の変遷や矛盾、そして宗教への到着を今ここで詳しく説明するのは差し置くこととするが、実証主義の不可知論性を、リトレの言を借りて再度強調しておきたい。「実証哲学は、無神論を受け入れない。よく考えて見れば、無神論者は何ら真に解放された精神ではない。即ちそれは、彼流に神学者である。彼は事物の本質の自分の説明を有している。事物がいかに始まったかを知っている。〔中略〕実証哲学は、それを何ら知らない。」⁽²⁰⁾ それで、無神論に対する神なき宗教が考えられたのである。

コントの思想や理論については、まだ色々な指摘が必要であろうが、本稿の話題に関係して来る要点を一応取り出した事とする。

2

実証主義はコント一人に限られず、その立場を取る人によって若干のニュアンスの違いが認められる。イギリスでコントの主張に同調した J. S. ミルの見解を、次に少々検討しておく事とする。

彼は感覚主義の見地から、認識を批判して、18世紀イギリスの哲学からバークリらの系統を受け継いでいる。「我々が物質について知ることのできる一切は、それが我々に与える感覚と、この感覚の生起の順序だけである。そして物体という実体 (substance Body) は我々の感覚の知られざる原因である一方、精神という実体 (substance Mind) は知られぬ知覚である。」⁽²¹⁾

「我々が対象の感覚的性質と呼ぶところのものが、対象に固有の何かであるとか、対象自体の性質と何らかの類同性があるとか信ずる理由はいささかもない。原因はそのものとしては、その結果に似ていない。〔中略〕我々の感覚に、物質はどうして類似していなければならぬ理由が

あるだろうか。〔中略〕又どんな原理に基づいて、結果から原因に関する何らかの事柄を、それが結果を生ずる適した原因であるという事以外に、我々は演繹する権能を持っているのか。それ故に我々は外部の世界について、それから経験する感覚以外には、何も知らないし、又絶対に何も知り得ないという事は、自明の真理として、又は今日有識者全てに認められた真理として、ここに安心して述べられよう。」⁽²²⁾ こうしたミルの言は、彼の定式、外的対象は“常に感覚しうること” (Permanent possibility of sensation) に、端的に表現される。かように彼も、不可知論的经验論者である。

従って彼は論理学を始めるに当って、形而上学を批難すると共に、唯物論的推理を信念の学として排除した。即ち彼は言う。「これら所謂知覚に、換言すれば、物理的のものであれ精神的のものであれ、精神の外にある客観物の精神による直接的認知は、私はただ信じるかどうかの問題だと思う。その信念とは、直覚的 (intuitive) であって、外的証明に依存しない事を求める。石が私の前にある時、私はそれから受け取るある感覚を意識する。しかし私がこの感覚は私の知覚する外部の物に由来すると言うなら、この言葉の意味するところは、感覚を受け取ることによって、これらの感覚の外的原因が存在すると直覚的に信ずるという事である。」⁽²³⁾ ところで、方法論が大切なのであるが、方法をささえるべき「論理学は、信念の学ではなく、証拠又は証明の学である。」⁽²⁴⁾ そして彼は、「論理学は、ハートリヤリード、ロックやカントの信奉者達が相提携する共通の地盤である」と書いて、⁽²⁵⁾ 経験論的論理学の普遍性を主張すると共に、イデオロギー性の排除に努めんとした。

彼の論理学は、言語の分析から始まる。そこでは名称は事物そのものの名称と考えられ、観念の名称ではない事も、また説かれる時もある。⁽²⁶⁾ そして所与の経験を一般化することが科学的知識の発展の条件であると考え、経験的帰納主義を強調した。それで、「数に関する科学は、我々が以前に到達した結論、即ち演繹的科学の諸手続さえも、やはり帰納的である事、その第一原

理は経験からの一般化である事、と言う結論に対して例外をなすものではない」とされる。⁽²⁷⁾

彼によれば、帰納的・実験的研究は、次の四方法を取る。⁽²⁸⁾

①一致法 (Agreement)。何らかの現象を研究する際に、幾つかの場合に只一つだけの一般的事情が起るならば、この事情は所与の現象の原因(または結果)である。

②差異法 (Difference)。所与の現象が起る場合と起らない場合とに於いて、一つの事情を除いて一切の事情が等しいならば、この一つの事情は所与の現象の原因(または結果)である。

③残余法 (Residues)。現象の中から以前の帰納によって、その原因の知られている部分が除去されるならば、残余の事実は残余の原因の結果である。

④共変法 (Concomitant Variations)。他の現象の一定の変化に伴って常に変化する現象は、この他の現象と因果的連関によって結ばれている。

彼は帰納法を自然科学の方法として確立する事により、あらためて精神科学の方法を正確なものにしようとするが、その中心に置かれるのは、やはり社会学的考察であり、社会の法則を見出さんとした。⁽²⁹⁾しかしここではむしろ、演繹法が重視される。即ちミルは、一般的条件が与えられている社会事情からどの様な結果が生ずるかに答える「特殊社会科学」と、そうした社会事情そのものを決定するのは何であるかに答える「一般社会科学」とを分け、前者の方法は、「推理によって結論を導出し、それを観察によって検証する」という順序を踏む「具体的演繹法」であるに対して、後者のそれは、「先ず特殊の経験から暫定的に結論を得て、その後アープリオーリな推理によってこの結論と人間性の諸原理とを結合する」という「逆の演繹法 (Inverse Deductive Method)」であるとする。我々はここに、ミルは決定論的志向ながら相対主義的な総合を企て、方法論的問題に最大の関心を払いながら、折衷的組立てに至っている事、

そしてそれらが実証的で功利的なものを導き出す努力である事に留意しておきたい。

ミルの社会学的観点は、人間の知的完成を社会発展の基礎と考え、思弁と確信を社会発展の決定的要因に位置付ける事でもある。そして、「思弁的〔科学的〕社会学の最高の分科に基礎を置いたかような実用的教訓 (practical instructions) は、政治技術 (Political Art) の最も気高く有益な部分を形成するであろう」⁽³⁰⁾と考へて、倫理学、経済学、政治論に功利主義的、自由競争的、自由主義的思想を展開した事は、よく知られている。それらの根底には実証的功利性 (Utility) の観念が一貫している事は、言うまでもない。

彼によれば功利とは、幸福を求める事であり、幸福は快楽に基づくと考えられる。そしてベンサム的幸福の量的規定「最大多数の最大幸福」を修正して、質的に、即ち、感性的快楽に較べて精神的快楽をより高く評価するために、利己主義のほかにも、「共感」と「仁慈への衝動」をもって「周囲の全ての人々の出来るだけ大きな幸福」を促す様に要求する利他主義の原理を導入して、倫理主義的に社会問題を解決しようとする。ここでは功利は福祉を意味し、政治は倫理を意味するものと考えられた。

こうしてミルは、コントに同調しながらも宗教に至らず、経験論的実証主義を展開した。我々はそこから、我々の本題の関心に係るべき点に沿って、彼の見解を以上に指摘した。

3

科学と社会学を強調し、コントやミルの考えと平行するところの多い学説として、ハーバート・スペンサーの思想を挙げることが出来る。

スペンサーは、1860年より30年間に亘って、星雲の生成から道德原理までを、全て進化の原理に基づいて解説し、第一原理 (総合哲学の総合)、生物学原理、心理学原理、社会学原理、倫理学原理を編成して、総合哲学体系を策定した。

彼はこの体系構築を始めるに当って、宗教と科学を考察し、宗教が非宗教的で、科学が非科学的である事を指摘しながら、両者を和解させ、

次の様な見地を示した。「常識は、実在の存在を主張する。客観的科学は、この実在は我々が考えている様なものではあり得ない、という事を証明している。主観的科学は、何故に我々はそれをそれぞれがあるがままに考える事が出来ないのか、しかも我々はそれを存在しているとして考える様に強いられているか、という事を教える。そして実在が、その本性上全く触知し得ないものであると言うこの主張の内に、宗教は、自己の主張と本質的に一致するところの、一つの主張を見出す。我々は、あらゆる現象は、我々に働きかけて来るところの、ある力の一つの顕現であると看做さざるを得ない。尤も、遍在という事は考えることが出来ぬものであるけれども、しかも、経験は諸現象の放散に対して、何の限界も明らかにしないのであるから、我々はこの力が現前していることに、限界を考える事は出来ない。それに科学の諸批判は、この力が不可知であるという事を、我々に教えている。しかもその限界を付する事の不能なることから、遍在と呼ばれるところの、一つの不可知力のこの自覚こそ、まさに宗教の有処であるところのその自覚である。」⁽³¹⁾こうして彼は自分の世界観を、「哲学的宗教学説」と形容した。

我々は今まで、コントやミルが形而上学を否定するのを見て来た。しかしスペンサーが不可知力の遍在を実体として認めるところには、形而上学的色彩がある。でも形而上学の否定は、必ずしも実証主義の根本要件とは言えぬであろう。何故なら、コントやミルが批判した形而上学は古い形而上学を対象としていたし、彼等が本質の追求や実在の探求は自分達の関心でないと云っても、それに替えて現象を、さらには人間性を、または感覚経験を、絶対という言葉は避けながらも唯一の、あるいは永遠の基体として論を展開した。彼等は、その様な基体としての拠点に原理を求めているのである。また形而上学とは、色々な定義があり、必ずしもコントの思想と相反しない。従って我々は今、形而上学であるかないかを規準にして考察することを差し控え、その他の点、特に科学の方法や成

果をどの様に自らの哲学に取り入れ、その世界観がどうであったか、あるいは決定論をどの様に考えたかなどを中心に検討する事とする。

既に明らかな如く、スペンサーは不可知論的立場である。彼は不可知者を絶対とするが、全ての知識は相対的であると考えた。⁽³²⁾そして相対主義の見地に立つが、しかしまた決定論者でもある。即ち、現象の領域に於ける普遍的進化が、彼の思想原理である。彼は進化の原理を、単立進化と複合進化、集中化、分化作用、不限定性より限定性へ、同質性より異質性へなどの相を通じて説明する。そして完全なる進化の定義を、次の様に言う。「進化とは、物質の統合作用と、これに随伴する運動の分散作用である。その間に於いて物質は、不限定的、脈絡の無い同質性から、限定的で脈絡を持った異質性へと移り行く。そしてその間に於いて、保持された運動は、これに対応した変態を受ける。」⁽³³⁾この進化は、やがて平衡に至るが、そこで解体作用が行なわれて、やがてまた進化が始まる。

スペンサーによる諸学の分類は、現実から離れて諸関係を記述するところの抽象的科学（論理学、数学、力学）、現実を記述する具体的科学（星天文学、太陽天文学、太陽鉱物学、地上鉱物学、生物学、社会学）、抽象的・具体的科学（力学、化学、熱・光・電気・磁気を含む物理学）とされる。この分類についてブリッジスは、宇宙の体系的説明であり、コントとは意図が異なっていると見る。何故なら、「そこで全体として、コントの科学の分類の枠付けの意図は、宇宙の説明を提出する事ではなく、科学を人の奉仕に段々に服さしめ得る様にするのが目的であった様に思われる」からである。⁽³⁴⁾確かにコントの目的はそうであったろうが、その意図の背後には、やはり世界観が土台になっていたと言えよう。

なおスペンサーは、科学の積極的な役割を大いに認めながらも、「最も低度な種類の知識は、不統一なままの知識」であって、科学は「部分的に統一された知識」であり、哲学は「最高度の概括性に於ける知識」で、「完全に統一した知識である」と言う階位で考えている。⁽³⁵⁾

そして社会哲学こそ、彼の目的であり、いつも他の原理の総合的帰結として、社会論となる。その社会学は、社会有機体論である。その中で、社会静学の対象は、完全社会の均衡であり、均衡への基本的条件である。これは平等自由の法則を導き、ひいては完全なる幸福をもたらす。社会動学はこれに対して、平衡現象とは集合体が経験する進化の変成過程の最後の結果であり、集合体に於いてその各部分が受ける力とこれに対抗する力との間に平衡が得られる迄、この進化の変成過程は断続するという考えのもとに行なわれる。また彼の倫理学は、遺伝によってその結果が固定されて行く進化の過程にあって、利他的衝動が次第に利己的衝動に優越して行くという事を骨子としている。

ところで進化論と実証主義的決定論の関係を、A. フイエは次の様に考えている。「現代の哲学にとっては、恒久不変とは多少とも一時的な状態であるが、変化の限界であるという事は実に正しい。しかし存在者の成形性や可動性は、決定論を何ら排除するものではない。何故なら決定論は、ある状態に対する決定に於けると全く同様に、ある変化に対する決定の内に存し得る。進化の観念は決定論を一層柔軟にするが、それは決定論を削除するものではない。」⁽³⁶⁾

4

以上に要約的ながら見て来た実証主義的見解をまとめて、実証主義の指標を示すと、以下の如くになると思われる。

1)方法論的関心が強く、科学的と言われる方法を、哲学の基礎的統一的方法として取り入れる。その方法は、機械論的であれ、経験論的であれ、進化論的であれ、相対主義的決定論である。

2)自然科学の成果の摂取に積極的である。

3)世界観としては、不可知論である。従って認識を現象的对象の上に限ろうとする。

4)進歩（あるいは進化）の観念と秩序（あるいは平衡）の観念に指導される。これと関連して、歴史主義であると共に体系主義である。

5)社会学ないし社会に関する学問を中心目的

とする。倫理的には功利主義を基調とし、宗教ないし宗教感情を肯定的に自らのものとする。

〔続〕

註

- (1) エリー・アレヴィによれば、実証主義という語の最初の使用は、サン＝シモン派に見られる。すなわち、「この方法は真の科学的方法である。それに一般的構想の存在に従ったその使用によってこそ、学は正確さと実証主義の性格を持つ。これは専ら計量器や対数表の使用が今日している様なものである」という一節を、サン＝シモン派の文献から引用して指摘している。A.Lalandeの編纂せる、*Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, P. U. F., Positivism 項への寄信。
- (2) Auguste Comte : *Discours sur l'esprit positif*, 31~33, Ch. 3, I, pp.64~69, (Bibliothèque des textes philosophiques), J. Vrin, Paris,1974.
- (3) 「現実的」とはほぼ同義と解せる。ここで言う「実在的」は、本質的存在とは関係ない。
- (4) op. cit. 30, p.64.
- (5) ibid. 34, Ch. 3, II, p.69.
- (6) 例えばA. Cressonは、フランス哲学者達の関心を、明晰性 (clarté)、確実性 (certitude)、秩序性 (ordre) であると特徴づけた。そして明晰とは、あいまいさに反対することと説明している。(La philosophie française ; préface. Que sais-je? N°170, P. U. F.) またコントは、秩序の観念を重視した。これらを思い合わせれば、フランス哲学は実証主義的だとさえ言う事も可能になってしまう。
- (7) A. Comte : *Catéchisme positiviste*, 1851. 宗教の項。
- (8) J. H. Bridges : *Illustration of Positivism*, pp.208~9, The meaning of the word Positive.ブリッジスによれば、この第6の意味は、1854年コントによって与えられた。
- (9) cf. A. Comte : *cours de philosophie positive*, 第一講の終りの部分。Oeuvres d'Auguste Comte, éditions Anthropos, Paris,1968年版では、tome I, pp.43~46.以後この本よりの引用はCoursと略す。

- (10) Cours, avertissement, p. X IV.
- (11) ibid.
- (12) Fragments de philosophie positive, p.246.
Foulquiéの哲学辞典、positifの引用文24。
- (13) Cours、第一講、p. 4。
- (14) Cours、第一講、pp.11~12。
- (15) Cours、第二講、p. 73。
- (16) Cours、第二講、p. 18。
- (17) Cours、第二講、pp.91~94。コントは晩年の著作『主観的総合』（1856年）で、人間の常態に固有な一般的思惟体系を説かんとし、その第一巻として、『実証論体系、または数理哲学原論』を設定した。
- (18) 『実証的政治体系』でコントは、倫理学あるいは科学的心理学を加えているが、最初彼は、心理学を独立学科としては排した。心理学は生物学と社会学に配分されねばならぬと考えた。それは恐らく、クーザンなどの観念論的心理学を見て、その形而上学的色彩を感じたからではないかと思われる。
- (19) Cours、第二講、pp.50~62。
- (20) Littré : Fragments de philosophie positive, p.109. Foulquié哲学辞典、Positifの頃、引用文23。
- (21) J. S. Mill : A System of Logic Ratiocinative and Inductive, Book I, Ch. iii, §15. Collected Works of John Stuart Mill, University of Toronto Press,ではvolume VII(1973), p.76。以後引用は、この版よりの頁数を示す。
- (22) id. Book I, Ch. iii, §7, pp.61~62.
- (23) id. Book I, Ch. iii, §4, pp.53~54.
- (24) id. Introduction, p.9.
- (25) id. Introduction, p.14.
- (26) しかし『ハミルトン卿の哲学に関する考察』の中で言われるように、ミルはやはり、命題も帰納も、単なる列挙以上の、自然を一様に作用する全体として考察しようとする習性の結果であって、心理的なものの域を出ていない様に考えている。
- (27) System of Logic, Book II, Ch. vi, §2, p.257.
- (28) id. Book III, Ch. viii, pp.388~406.
- (29) id. volume VIII, (1974). Book VI : On the Logic of the Moral Sciences.
- (30) id. Book VI, Ch. x, §8, p.930.
- (31) Herbert Spencer : First Principles, Part I, Ch. V, §27, p.99, D. Appleton & Co. , New York, 1891.
- (32) ibid. Part I, Ch. IV.
- (33) ibid. Part II, Ch. XVI, §145, p.396.
- (34) Bridges, op. cit. p.192.
- (35) Spencer, op. cit. , Part II, Ch I, §37, p.134.
- (36) Alfred Fouillée : le mouvement positiviste et la conception sociologique du monde, p.30, 2éd. , 1896.